

# にれのき

2010 autumn

特集：思春期を揺らす合宿

<http://elm-ac.jp/>

# 揺れながら成長する十二歳

初めての合宿で先輩たちの輝く姿から「なりたい自分」を見つけたタケシ。その喜びの一方で、学校でそうならない「もどかしい自分」にも気づき、愕然としました。「なりたい自分」と「今ある自分」の狭間で揺れ動くのが思春期の子どもたちです。

タケシがその葛藤に向きあい、次への一步を踏みだすきっかけをつくったのは、合宿とともに過ごしたクラスの仲間たちでした。(文中仮名)

## 悩む中学1年生

「聞いてくれよ。浅野」

9月中旬。この言葉を皮切りに、中学1年生の子どもたちは悩みを次々に語り始めました。

「学校はみんなちゃんとやろうとしてない」

「最近、勉強する気が起きないんだ。難しいし……」

「変なあだ名で呼ばれて、からかわれるんだ」

「クラスにグループができていて、雰囲気が悪い」

「よくちよっかいを出される。この間は蹴られたんだよ!」

2学期に入り、彼らを取り巻く環境が慌しくなってきた。子どもたち一人ひとりが友だち、学校、親、さらに自分自身について深く考え始め、矛盾や不安にいらだちを募らせ、心が大きく揺れているようです。

## タケシの悩み

「自分は、最近学校が嫌いだ」

タケシの合宿の日記の一文に、私はドキッとしました。

タケシは小学4年生から3年間エルム小学部で過ごしてきました。授業や特力りを通しての話し合い「やキャンプなどのさまざまな行事を通して、仲間と一緒に一生懸命に取り組むこ

との楽しさや魅力をいつも身体いっぱい表現してくれる子でした。

『(前略)みんなが気づかないところでも、いつも仲間のことをあたたかく見つめ、優しく励ましてあげたり、気持ちを代弁してあげたり……仲間同士のつなぎになっていたのがタケシでした。そんなタケシのことがみんな大好きで、タケシのまわりには学年を超えた輪がいつもできていました。』

さあ、いよいよ新しい中学校生活が始まります。中学時代は自分をどこまでも伸ばしていける素晴らしい時期です。仲間を多く巻き込みながら、仲間とともに、のびのびと豊かに新たな生活を楽しん

でいきましょう。』

これはエルムからタケシに贈られた卒業証書です。小学校でもエルム同様に仲間を大切に過ごし、地元中学校にも期待をもって進学していきました。

これまで新しい中学生活について、彼が不満を口にしている姿は一度も見たことがありません。だから、私は「学校が嫌いだ」と書いた彼の心の葛藤がすぐには分かりませんでした。

8月下旬、新学期が近づいて、終始ボーっとしているタケシの姿が目立つようになりました。どうすることもできない「何か」にたいするもどかしさと脱力感を抱えているよう

した。そこで私はタケシ本人と面談をすることにしました。タケシは真剣に語ります。

「学校にいただけで拒絶反応が起きる。学校の体育祭のときだって、やる気がない人も何人かいたんだ。エルムは合宿のスポーツ大会で、みんな一生懸命で全力だった。だから勝つても負けても、気持ちが良かったんだけど……」

すごく寂しそうな表情を浮かべ、たまっていた不満や不安が噴き出されていきます。「学校では男女ともに、クラスにグループができています。一人



ぼっちの子もいる。そんなのが嫌なんだ。一人ぼっちの子のところへ行ったりしている。でもそうやってるのは俺だけのような気がするし……」

学校でのもどかしい姿が少しずつ浮かんできました。

「クラスみんな、あんまり笑っていないよ。楽しくないんじゃないかな。不登校の子だっている。ケンカや争いごと絶えない。授業中もうるさくてさ、勉強できる雰囲気じゃない。先生

は注意するけど全然ダメ。収まるのはその場限り。俺も何度か注意したんだけど……そんな雰囲気じゃなかったから、俺が一人で言っても無駄で……」

なかなか思うようにいかない状況に耐え切れず、学校のクラスや仲間たいして気持ちも折れかかり、身体さえうまく動かなくなっているようでした。

タケシがここまで失望感を募らせた訳は、なんだったのでしょうか。

## タケシのあこがれ 〜輝く中学3年生

「エルムの中3の人たちを見ていたら、すごかったんだ。輪に入れていない子も『みんなでするよ』に声をかけたり、本当にすごい。すごかったよかったです」

目を輝かせ、生き生きと語るタケシ。彼にとって初めての合宿は衝撃でした。そこで彼が見たものは、彼自身が大切にしていた「仲間を大切にする」「一

人ぼっちをつくらない」という思いを、中学3年生たちが真剣に追求している姿でした。仲間の気持ちを丁寧に聴き取り、寄り添い、励まし、待ち続ける。そして、少しの変化にも気づき喜びあう。そんな姿にタケシは、感動したのです。

合宿最大の行事の一つであるスポーツ大会後、タケシは日記にこんな言葉を書いています。

「今日は夢みたいない日だった。夢みたいだけどこれは現実。自分の団の中3に本当に勝ってほしかった。勝つために、もっとながらばれたと思う。でもそれだけでなく相手の団にも勝ってほしくなってしまう俺がいる。」

自分は、最近学校が嫌いだ。体育祭で勝つてもうれしくなかった。負けたら怒りがこみあげてきた。でも合宿のスポ大では、負けたとき泣きそうになるくらい悔しかった。合宿では負けたけど相手の団とも仲良くなれた。

3年生へ。初めてで分らないことがありすぎて全力を出しきれなかったのかもしれない。だ

から本当にゴメン。謝っても謝っても一生許されないかもしれない。だから来年、再来年は3年生の思いを受け継いで勝ちたいと思う」

東京での事前活動で、カッコいい応援ダンスをつくり、親身に教えてくれた中学3年生。各競技や応援合戦にも、団結と最高の笑顔を追い求め、全力で挑んでいました。わずかの差で優勝を逃して泣きじゃくる先輩を見て、多くの中学1年生も涙を流したスポーツ大会でした。

「一生懸命にやることの大切さ、カッコよさ」をタケシは痛感し、「こんな自分になりたい」そう強く思えた瞬間でした。

## タケシの第一歩 〜先輩に近づこう

合宿でそんな気持ちになれたタケシが、これまでの学校の状況を捉え直すことで、心の中にしまっていた自分のもどかしさに気づき、思いがあふれてしまったのです。

タケシは思いを話してくれた



あと、つらい表情を見せ、黙ってしまいました。私は「タケシにとって、かつこよくて輝いて見えた中3の先輩たちは学校ではどうなんだろうね」と尋ねました。

「……それは知りたい」と、表情がパツと明るくなりました。

「タケシと同じように、もどかしい思いや経験をしてきたみたいだよ。今だって、しんどい思いをしているかもしれないよ」

「えー、そうなんだ」と素直に驚くタケシ。

「じゃあ、なぜ今は輝いて見えるのかな？」と私が尋ねると、また黙ってしまいました。しかし、表情は明らかに柔らかくなってきました。

「どうして？」とタケシが私を急かします。

「それはあの子たちがあきらめないで踏ん張り続けてきたからじゃないかな。今はダメでも次

はこうしよう、ああしようって。

エルムだけが楽しくても、学校が楽しくなきゃ意味がない。エルムが楽しくても学校が嫌だったら、すっきりしないよね？」と私が話すと、

「うん」と大きくうなずきます。

「そっだよね」と私もうなずき、また話を始めました。

「学校でもエルムと同じ気持ちでいたからこそ、どんな状況だって協力しよう、みんなで合

宿をつくるうって中3の子たちは

は言えたんじゃないかな。きつと先輩たちも踏ん張り続けてい

るんだ。だから真剣だったし、

一生懸命。それを知ったら余計

にかつこよく見えるよね」

「うん。やっぱりすごいな」と、タケシは改めて中学3年生に感

心したようでした。そして、

「俺も頑張ってみよう。そして

先輩たちみたいにあきらめないで、学校でも頑張ってみよう。何事にも一生懸命にやるよ」と前

を向きました。あの先輩たちに

「近づきたい」というあこがれ

が、新たな一歩を踏み出す勇気を

を生み出したのです。

を成長させると考え、クラスに

タケシの思いを投げかけ、話し

合いをしました。

「……今の学校は嫌い。みんな

ちゃんとやるうとしてない」と

タケシが口を開くと、

「それ、ふつうじゃね？ うち

もいるよ」と、即座にマサシが

応えます。

「うん、うん。いるいる……」

口をそろえてみんなも言いま

す。

「いやあ、でもさ、体育祭も真

面目にやっていないし……。授

業中もうるさいし」とタケシが

なおも続けると、みんなも真剣

### タケシの安心 仲間と気持ちを「つなぐ」

面談を終えた後、タケシの顔

色は良くなったものの、時折、

浮かない表情を見せることもあ

りました。スッキリした部分と、

ているタケシの姿がみんなにも伝わりました。

「そつなんだよ……」と嘆くタケシの言葉が、みんなの心にズシリと重く響きました。

沈黙が走ります。みんなも同じような状況が自分の学校にもあるから、痛いほどタケシの気持ちかわかる。だから何も言えなくなっているようでした。

「みんなも学校で嫌なことをされたり、おかしいなって思ったことある？」と私が尋ねると、

「ある、ある」と、冒頭の場面のような悩みや不満がクラスの仲間から湧き出てきました。

そして「同じことを考えている子がいてうれしかった」トモのこの言葉をきっかけに、クラスの雰囲気が変わると、あたたかく気持ちのいいものになりました。

少し和らいだようでした。「苦しんでいるのは自分だけじゃない」、タケシとクラスの仲間み

んなが、そう思える話し合いでした。

「そう。困ったときは、とにかく話をしよう。声をかけあおう。みんながエルムでも学校でも、どんなところでも気持ちよく過ごせるために、そのことをみんなで考えていこう。そのための仲間だし、そのためにエルムはあるんだよ」私がこう話をすると、みんな安堵の表情を浮かべました。

クラスで話し合いをすることで、いろいろな意見が出てきます。悩みを抱える子もクラスの仲間も問題をしっかりと認識することができま

す。悩みを抱える子もクラスの仲間にも問題を感じたり、素直に気持ちを話しあうことは、悩みは仲間

に相談していいんだ、そうすることで気持ちが和らぎ、勇気

をもらえたり、一人ぼっちじゃないんだ、という気持ちになれるのです。

### 思春期を乗り越えるために

「何とかしたい」「でも……」という理想と現実とのギャップに苦しみ、あこがれとどかし



さが同居し大きく揺れる子どもたち。自分に自信が持てず、自分自身を見失いかけることもあります。強がったりもしますが、実はもろく壊れやすい時期なのです。

ただ、そんな彼らにも仲間集団があれば、一歩踏み出せる自信や勇気を得ることができま

仲間とのつながりの中で、「こ

うなりたい」という自分の生き方が見えきたのです。

中学1年生から高校生3年生までの異年齢集団で行われるエルムの合宿。7泊8日一緒に生活して、関係をつくり、自分と仲間を捉え直す。そして仲間とともに一緒に悩み考え、進んでいく。手を取りあうきっかけをつくる合宿は、思春期の彼らにとって、まさに貴重な「ひと夏の経験」です。

できたからこそ、タケシのま

ざしは小学部時代をともに過ごした後輩たちにも向けられまし

た。タケシの最終日の日誌は、こう締めくくられています。「今の小学部のみんなにも、この楽しさ、感動を味わってほしい。こんなにもいっぱいまっているのは、エルムでしか味わえないので、このいろいろな興奮を本当にみんなのものにしてほしい。本当に良い合宿だった」

(文責：浅野)

# 数学科授業 「超えるスカイツリー!!」

数学なんて大嫌い!

私には毎週のエルムの授業をおこないながら強く感じることはありません。それは数学が苦手だったり嫌いだったりする子どもたちがとても多いということです。

苦しそうな顔をしながら計算をする子どもたちに、ある授業で私は質問をしました。

「この中で数学が苦手または嫌いだっていう人?」

この質問に手を挙げた生徒はほぼ全員だったことは授業をおこなう立場の者として相当シヨックだったことを覚えていません。次に私はこう尋ねました。

「なんで数学が嫌いだったり苦手なのかな?」

ある生徒は「だって意味の分からない計算をたくさんしなきゃいけないじゃん」と言いま

した。別の生徒は「数学ってずっと机に向かってガリガリやる感じだから面白くない」と言いました。その他にもいるような意見が出ました。すべての声に共通していたのは「机の前にじっとして、計算をやり続けなければならぬ数学は楽しくない」というものでした。

数学という学問と、計算は決して切り離せないものです。当然学校やエルムの普段の授業でも計算する時間が多くなるのは仕方がないことですが、子どもたちにとって【数学＝計算】ということでは数学が嫌いになってしまっているのだとしたら非常にもったいないことです。「どうにかして彼らの数学観を揺さぶるような授業はできないだろうか?」という思いが私を含め

た数学科教員の中に強くありました。

## 心揺さぶる授業を

合宿での授業のために数学科教員の中でさまざまな授業案が検討されました。「普段の授業では経験できない合宿ならではの授業を」「子どもたちの数学観を揺さぶることができるような強く印象に残る授業を」と考え抜いた結果、単に計算問題を解いたり公式を暗記するだけではなく、筋道をたて計画的に考え解いていくこと、仲間と問題を共有し、助け合いながら解き明かすことの面白さを実感することを狙いとして、今回の「超えるスカイツリー!!」が選ばれました。

また、この授業が選ばれたもうひとつの理由に、子どもたちの「数学とは机に座ってガリガリやるもの」というイメージを



天井にも届くタワーを作りあげたチームがありました。



一回戦目後の作戦会議。より高くなるように全員で知恵を出しあいます。

打破したいという思いもありました。合宿ならではの広い教室や日常から開放された空間という利点を生かせば、机の上だけに留まらないもっと自由で活動的な数学の授業ができると思います。

もちろんただ闇雲にタワーを作るだけでは授業にはなりません。だから今回の授業は一度タワーを作った後に、各チーム自分たちのタワーの特徴・工夫した点を発表させ、その後次を作るタワーの設計図を書いてから二回戦目をおこなうという形式をとりました。(詳しくは下のルール参照)

大切にすることは自らが一度作ったタワーや他チームのタワーを自らの経験とし、それら



意識を集中させて新しい段を積みます。緊張の一瞬です。

を進展させ、より良いものを作るといことです。議論することや考えることで、前回を超えることが楽しい・面白いと感じられることで数学という学問の奥深さを感じられるのではと期待しています。

### 数学の魅力

いざ授業が始まると子どもたちの反応は私の予想を超えて素晴らしいものでした。みな一緒に目を輝かせながら、「どうやって高いタワーを作れるか?」「一生懸命考えていました。」

「土台はどうやってたら強くなるだろう?」

「タワーの先端はやはり細く

した方が安定するんじゃないか?」

中には一生懸命になるあまり「天井にタワーを貼り付けて良いか?」と言い出す生徒もいました。「さすがにそれはなしだ」と、そこまで一生懸命になる生徒のことをうれしく思いながら、伝えた場面もありました。

苦手だと感じていた数学でも、仲間と話し合い、高めあっていくことで楽しいと感じることができたようです。そのような経験を積み重ねて、すこずつ考えを深化させていく数学という学問の魅力を伝えられた授業ができたのではないのでしょうか。

(文責:根本)

## 授業後の感想より

数学は嫌いだけど、こういう意見を出したりして、どうやったら上手くいくかを考えていくのは面白いと思った。

普段は「√とか何に使うんだよ!!」と思うけど(買い物とかでも使わないし)、こうやって分からないことや、どうしたらうまくいくかというのを考えるような、思わぬところで応用や知識として使われたりするのかもしれないと思った。

これからは数学を物事を片付けるときに効率いいようにするために学ぶという姿勢でやっていこうと思う。

(中3女子)

## 「超えるスカイツリー!!」ルール

- ① 紙とハサミとセロテープを使って、できるだけ高く積み上げればOKという単純かつ燃える授業です。
- ② 時間は1回戦(3分間)、2回戦(10分間)です。「用意…スタート」で始まり「ストップ」の合図と一緒に手を動かすのをやめてください。
- ③ 全部で2回戦やります。最初は作戦会議なしで作ってみて、2回戦目は1回戦目の結果をグループで相談して、作戦会議をしてから立ててもらいます。
- ④ 作戦会議のときは実際に作るのナシ。設計図を作るのはあり。

# より素晴らしい劇を創るために 演劇ワークショップ



まずはコミュニケーションゲームで心と身体をを開放します。



台本の読み合わせ。みんな真剣に役作りを考えています。



台本をもとにチームごとに演技を考え、発表します。



最後に、講師の浦吉さんと大月さんも参加して発表をおこないました。

夏の合宿では、中学生高校生たちが平和をテーマに創作の演劇をおこないます。

「どのようにして子どもたちが劇を創っていくか」は「にれのき」(06年10月号)ですでご紹介をしました。さらにより良い演劇を創っていくため、昨年来、夏休み前に青年劇場にご協力いただき、演劇教室を開いています。

昨年は本物のプロの演劇を観てみようということで「キュリー×キュリー」を鑑賞。

そして、今年は「演劇ワークショップ」をおこないました。中学2年生から高校2年生までの生徒が36人、教員も9名が参加しました。

講師は青年劇場所属のプロの女優、浦吉ゆかさんと大月ひるみさんの2名がとめてくださいました。

まずは、体をほぐす軽い体操。そして、会場の中を動き回りながらや仲間と息を合わせるコミュニケーションゲーム。笑いの連続で参加者全員が打ち解けたところで、チームに別れて、劇を演じます。台本は青年劇場で実際に上演された作品を使用。チームの中で役を振り分け、読み合わせしながら演技を練習。まとまったところで、チームごとに発表。各チーム、それぞれの個性が出て、同じ台本でもこれほど変化するのかと感動しました。

ワークショップの最後に、講師の方から「アクションよりリアクション」というアドバイスをいただきました。演劇で大事なことは、舞台上で演技をしている人よりその演技に反応する人が大切ということ。参加者一同納得の言葉でした。

これらの成果をたずさえての今年の合宿。高校生は喜劇に、中学生もオムニバス形式の劇にと新たな挑戦をしました。この間の取り組みの中で、演劇の質は飛躍的に向上していったように思います。

(文責…矢沢)